

6年3組ジェンダーエスノグラフィー

大庭 宣尊・川平 宏美*

(受付 2003年5月9日)

1. 問題設定

1.1. 「教育とジェンダー」研究

「ジェンダー」という概念は1970年代以降の第2波フェミニズム運動において登場したもので「オス、メスといった生物学的な性のあり方を意味するセックス (sex) に対して、文化的・社会的・心理的な性のあり方を指す言葉である。簡単に言えば、『男はこう (あるべきだ)』『女はこう (あるべきだ)』といった社会的枠づけや、『男らしさ』『女らしさ』といった『らしさ』を意味する」(伊藤：1998, 6)。ジェンダーはセックスとは違い、自然が生み出した「性」ではなく、人間が社会の中で相互作用を重ねていくうちに構成されていく「性」なのである。第2波フェミニズム運動は20世紀初頭に盛り上がった第1波フェミニズム運動(女性の参政権の獲得をはじめ制度的な権利の平等を主張した)とは違い、「平等世界の実現に向けてこれまでの『教育／知識を見直す』ことを重要なテーマとしていた」(亀田：2000, 22)。

とすれば、当然のように「男らしさ」「女らしさ」を形成するエージェントとして学校教育が注目されることになる。それまで自明のものとされてきたさまざまな制度が、ジェンダーの視点から見ると男女の「あるべき姿」を刷り込む役割を担っていることが明らかになってきた。学校教育が社会

* 本稿は広島修道大学人文学部学生・川平宏美(人間関係学科教育学専攻2003年3月卒業)が作成した卒業論文をベースとして、当論集掲載のために加筆修正を行ったものであり、オリジナル原稿は教育学専攻 HP [<http://edu.shudo-u.ac.jp/index.html>] に掲載しているので参照願いたい。

の不平等装置を作り上げていたのだ。「学校はフォーマルなカリキュラムを学ぶ以外に、学習されることが明示されていないにもかかわらず、学習されるカリキュラム」(亀田, 30)である“隠れたカリキュラム”が存在していると指摘されるようになった。「隠れたカリキュラム」は「児童や生徒としてふさわしい行動はどのようなものかというメッセージであったり、成績の序列に関するメッセージであったりする。それらのメッセージは、教師の発言や子ども達への働きかけのようす、学級運営や学校行事における慣習などさまざまなチャンネルを通じて、インフォーマルに子どもたちに伝達される」(木村:1998, 36)。その中にジェンダーに関するメッセージ(「男らしさ」「女らしさ」とは何かというようなこと)も含まれ伝達されているのである。

ジェンダーに関するメッセージを伝える場として注目されたのが授業における教師と生徒のやりとりである。このやりとりに関する研究は、サドガー夫妻(サドガー・M & D:1994=1996)のものを始め数多くあり、同じ教室で同じ授業を受けているにも拘わらず、男子と女子は異なるメッセージ(性役割など)を受け取っているという現状を指摘した。

このようにジェンダーの視点を取り入れることで、男女を分け、「らしさ」を伝達している学校文化に疑問を唱えることに成功した。これまで学校が気付かず、見えないものとして扱ってきた問題を見えるところに引き張り出したのが「教育とジェンダー」研究だと言える。

1.2. 調査の目的と概要

「教育とジェンダー」研究は、学校内の観察調査を始め、教師への聞き取りなどさまざまな方法で進められ、「男らしさ」「女らしさ」を決定付ける上で果たす学校教育の役割を指摘してきた。だが、それは現段階では、どこに男女の差別があるのかを見つけるに留まっている感が強い。

近年「ジェンダーフリー教育」が提唱され、教師の指導法や教科書の見直し、男女混合名簿など改正が進められている。現在模索されているジェ

ンダーフリー教育を進めていくにあたり、もっと子ども達の考えていること、内面まで知る必要があるだろう。

そこで、本研究では小学校に焦点をあてた調査を行なうことにした。小学生という時期は、思春期を迎える前で、大人に対して反抗的な態度を示すことはほとんどなく何でも吸収する。この時期に得た経験や知識は成長していく上での土台にもなると考えられるからだ。子ども達はすでに「男とは何か」「女とは何か」という一定のイメージを獲得しているのだろうか。さらに、小学生の男女が学校でどのように関わり合っているのだろうか。「男」や「女」に関するイメージが、その関わり合いにどのように影響しているのだろうか。こうしたことを知ろうと、小学校の1クラスに入り込み、日常の小さなやりとりから観察を行うことにした。その際、学校内の男女差別を見つけ出すことよりも、教室内の相互作用場面での生徒達の様子を丹念に記述することで浮かび上がってくるものを大事にしていくことにしよう。

なお、調査対象となる生徒達は、広島市内のA小学校の1クラスである。調査期間は2002年2月の7日間、10月の6日間である。調査開始時は5年生で、2回目の調査時は6年生になっている。担任（男性）のB先生は調査者（川平）の知己であり、子ども達には「小学生の学校生活を知りたいからみんなと一緒に学校生活を送りたい」と伝えた。

2. 相 互 作 用

2.1. 教師－生徒の相互作用

2.1.1. 授業中での生徒の発言

教師と生徒達がどのようなやりとりをしているかを調べるために、授業風景をビデオに撮り、その風景を見直していった。いつもの授業風景の中にB先生の行動で目をひくものがある。授業を進行しながら常にカードをシャッフルしているのだ。

生徒達が挙手をして教師が指名するという授業だけでは、声を出す生徒

がどうしても限られてくる。B先生は多くの生徒が声を出せるような授業作りを目指し、生徒ひとりひとりの名前を書いたカードをシャッフルし、“めくって出た名前”の生徒を指名するのだ。このような方法を使い多くの生徒が発言する機会を増やそうとしているのである。

この方法は男女を分けずに指名することができるという利点がある。しかし、B先生自身、今現在、男女を区別しないために何かをしているというような特別な配慮はないと言う。だからであろうか生徒が挙手をし、先生が指名するという形態の授業では、次のような状態になる。

生徒達の挙手状況は、男子の方が圧倒的に多く女子は少ない。女子の挙手者を全員指名したとしても、男子の指名回数が多くなっている。そして、担任の問いかけに対する生徒達の反応は、男子からの方が圧倒的に多い。女子が1人で話すことはほとんどなく、話そうとしたとしても複数の男子の発言に消される状態であった。指名された場合以外の授業中でのやりとりは確実に男子と担任だけに限定されているのである。

ちなみに、木村涼子は6年生の授業風景を観察した時に出た結果を次のように述べている。「観察したすべてに共通していたのは、男子の『雄弁』と女子の『沈黙』という実に非対称な構図であった。(中略)教師—児童間の相互作用の量は、女子よりも男子の方が多いことは明白である」(木村：1999, 100-101)。そして、木村はこの風景を「男子の教室支配」と呼ぶ*。

2.1.2. 自分の気付かないところで…

下のやりとりは、男子による「授業支配」(木村涼子の言う「教室支配」)についてB先生に聞いた時のものである(Tは先生、Qは調査者)。

Q：授業中のことなんですけど、手を挙げて発表するのではなくて、自分から

* この6年3組も同じようなことが言える。ただし、本稿ではこれを「教室支配」ではなく、「授業支配」と呼ぶことにしたい(その理由は後の2.2で詳述する)。

発言するのは男子だけで、先生と男子だけの会話になっている部分が多いんですけど。女子はただ、話を聞いているだけで。手を挙げるのも、男子ばかりで、挙げる女子は決まっていて、指名する人も男子が多く見えるんですけど、これまで、女子に手を挙げさせるようにしようとしたことなどはないんですか？

T：女子じゃ男子じゃって考えたことないもん。挙げさせるのは、個人の問題じゃけ。そういう風に見ればね、確かに男子とよくやっとなるように見えるんかも分かんけど、こっちから言わせれば、そういう見方の方がおかしいんじゃないかと思うよ。自分自身、そういう意識は全くないし。今のうちのクラスの目標は、たくさんの子に声を出させたいっていうことで。

Q：それって、女子のほうが難しいんですかね。

T：今の時期特にそうじゃね。女の子だったら（手で下がるしぐさをしながら）こうなってくるのはあるから、だからって取り立てて女の子を（前に）出そうってのはない。個人レベルよね。男の子女の子じゃなくて。

B先生は、生徒達を男女で分けて捉えるのではなく、個人レベルで捉えようとしており、また、個人レベルで捉えることがその教育実践上の必要十分条件だと考えているようだ。

しかし、個人レベルと言っているのは、男と女をカテゴリー化し、性役割を認識させていることが分かる場面があった。

1つは、学年合同の参観日に向けて、詞の朗読劇の練習中に、「みんなの順番がくるのをみんなのお母さんが『きた、きた』で楽しみに待っているよ」と発言。この言葉にこめられているのは「参観日＝母（女）」である。参観日には女が行くもの、父である男は行かない（行くことができない）、学校の行事に参加するのは女である、生徒の世話をするのは女の仕事だということを認識させることになる。その時の生徒達の様子は何の変化もなく、当たり前だという風にうなずいていた。このことについてB先生は次のように話している。

T：わし、そのときだけだと思う。いつも、「お家の人」って言よるけ。（でも）実際問題、そういう考えがあるけ、ポツと出たんじゃろうね。父親が来るってのは珍しいけーね。当然、こっちはお母さんが来いとは思っていない

けど、誰が来てくれたってそれはいいことで、じいちゃん、ばあちゃんでもいいわけで、いっこうに構わないんだけど…。

あるいは、理科の授業で「石」についての勉強中に、下のように、生徒達に石を使って何をしたことがあるかを質問。「男子はあるじゃろ、石を投げて遊んだり」「女子はあるじゃろ、まあ、きれいな石！！と言って拾ったり」。

男がする遊びと女がする遊びに分け、それを伝達している。このことについて、B先生は次のように話している。

T：あれは、意識して言ったと思う。

Q：女の子は石投げたりせんのか？

T：いやー、そういうわけじゃないけど、あるじゃん、やっぱり、そういうのはあると思うよ。本来持っているものってのが、違いつてのは。みんながみんなじゃないけどのはあるかもしれんけどね。だけど、そういうことする方が多くなってるのがあるじゃん。

ここで問題になるのは、「個人レベル」で生徒達を考えているというのに、なぜ「男は」「女は」という捉え方をするかということである。先に見たように、このB先生は「個人レベル」で捉えるということを教育実践上のルールとして自分に課している。その意味では、「女じゃ、男じゃ考えたことないもん」「そういう見方の方がおかしいんじゃないかと思うよ」というように、カテゴリーで考えることに対して拒否反応を示すのも理解できる。だがしかし、ここに「ジェンダー」という視点を導入した瞬間、別の様相が浮かび上がってくる。

ジェンダーの視点から考えると、本来なら個人であるはずの1人1人の生徒達が「男」「女」というカテゴリーでくくられ、そのカテゴリーにふさわしい役割を果たすように作られていくということに問題がある。B先生は、理科の時間の発言にあったように、「男」と「女」には「本来持っているもの」に違いがあり、それは遊びの中で説明できるとしている。この認識から見えてくることは、ジェンダーバイアスがかかっているのか否かに

関しての無関心さであり、「男」「女」というカテゴリーへのとらわれであり、その結果、B先生は「個人レベル」という自ら課したルールへの裏切りを行ってしまったのである。

2.2. 男子－女子の相互作用

男子と女子は、それぞれお互いのことをどのように認識しているのだろうか。アンケートの中で「異性に言いたいことはあるか」という質問をし、自由に書いてもらったところ、さまざまな意見が出てきた。男女の意見は以下の通り。

- * 女子：静かにしろ／ふざけすぎ／人の話に首を突っ込むな／係の仕事をしろ
／他人に迷惑をかけるな／注意したらすぐにやめてほしい／もう少し
しっかりしてほしい
- * 男子：静かにしてほしい／帰りの会で男子の悪口を言うな／男子が2人で行
動することを非難するなら女子もやめろ／親に女をいじめるなど言われ
ているからやり返せない、それで男子が弱いと思われたくない

これを見るとお互い相手に対してあまり良いイメージを持っていないことが分かる。この質問は異性の悪い所を書くようにという指示ではなく、異性の良い所も書いていいという指示であったが、内容を見ると、良い所を書いた生徒は1人もいなかった。

また、「クラスの異性とどのようなことをよくするか」という質問に対して一番多かった回答は「協力して何かをする」と「けんかをする」であった。「けんかをする」についてはほとんどの生徒が「よくする」と答えている。一方の「協力して何かをする」について説明をくわえるならば、学校生活が班で動いているため、その班の子と何かをするというレベルのものであって、自主的に男子と女子が活動を共にするというわけではないのだ。

また、「けんかをする」については、生徒達は男女でけんかをよくすると答えているが、この“けんか”は口げんかのことで、男女が殴り合いのけんかをしているわけではない。では、口げんかをして勝つのはどちらなの

か。それは、8割～9割は女子の勝ちで終わる。男女の力関係は圧倒的に女子が上であるように思われる。女子が男子を引っ張り、時には乱暴な言葉を使い男子を黙らせ、女子の言うことを聞かせるという光景を多く観察することができた。男子は女子の攻撃に対して、黙って引き下がるわけではなく、反撃にも出るが、結局は女子の一喝であやまることになる。女子に何を言っても自分達に有利な結果が得られることはない、男子は思っている。

Q : クラスの女子はどのような子？

M1 : えっとね、怒りっぽくて、なんかね、怒ったらねー。

M2 : 怒りっぽくてー、ちょっとふざけがないね。

M3 : そうそう、ふざけがない。

M1 : (女子は) おもしろくない。

M3 : ちょっとふざけたことしたら、すぐ怒るよね。「やめんさいや！」ってね。

M1, 2 : そうそうそう。

M3 : すぐ「みんなに言いたいこと」で言われるけーね、何もね、みんなできいない。

M2 : それで、いつも俺達が負ける。

M3 : そうそう、いつも俺らが負けるんだって。

Q : いっつも負けるん？何で？勝てんの？

M2 : いや、女子はいつも先生を武器にする。

M3 : そうそう、先生を武器にする。

Q : あー、それで男子が先生に怒られるんじゃ。

M1 : そういうこと。

一方、女子は、なぜ自分達が男子に勝てるのか。次のように語る。

Q : 小学生って言ったら力はあるまり変わるのじゃない？男子も女子も。

F1 : うん、変わらんよ。

F2 : 女子は団体じゃもん。

Q : 男子は個人個人で向かってくるんじゃ。

F2 : (男子は) 個人個人じゃけど (女子は) 団体じゃけ。

F1 : (女子は) 団体でうわーってくるけーね。

(なお、データ中のMは男子、Fは女子、数字はそれぞれ生徒を指す)

男子は自分達の行動が正しくないと分かったからあやまるのではなく、不満はあるが、女子の団体の力や先生を巻き込むというやり方に圧倒され、あきらめてあやまっているのである。6年3組は男子19人女子14人のクラスであり、人数的に見ると男子が圧倒的に支配しているような予測が立てられよう。ところが、実際には、男子が女子の勢いに押されることが多い。女子のパワーは人数差をものともしない。

さて、ここで、先程の授業場面での男子の発言量の圧倒的多さを思い起こしてみよう。男子は授業を支配していたはずだ。ところが、授業以外の場面となると、女子が男子を圧倒していくのである。つまり、男子が支配しているのは授業場面に限られる。授業中というフォーマルな場面では男子が支配しているが、休憩時間などインフォーマルな場面では女子が支配しているということである。男子が支配しているのはあくまで「授業」。だから、少なくとも6年3組に関して言えば「男子の授業支配」と言えるのだ。

このように、生徒達のインフォーマルな場面では、男子が女子の攻撃から逃げるといった構図が出来上がっており、男子は教員のいる授業というフォーマルな場面だけしか女子を黙らせることができないでいる。

2.3. 同性同士の相互作用

生徒達の様子をより詳しく知るために、男子同士、女子同士の間ではどのようなやりとりが行われているのかを見ていく。

日常の行動パターンにおいては、男子同士・女子同士で明確な違いが確認できた。女子は、仲良しグループが決まっており、そのメンバーといつも一緒に行動をしている。このグループでの活動が学校生活の中心で、ひとりで何かをするということはほとんどない。一方、男子は特定のグループで行動することはまれであり、同じ班の男子、たまたま同じところに居合わせた男子と一緒に何かをしているか、ひとりで何かをしている。そ

れゆえ毎日多くの男子と接触をしていることになる。

男女の休憩時間の過ごし方の違いは、男子は大休憩や昼休憩になると、ほとんどが外に遊びに出て、一緒に遊んでいる。その他の時間（給食準備中など）は、当番ではない男子達と動き回って遊んでいる。女子は男子のように遊びに出ることはなく、教室に留まり、話をしたり本を読んだりして時間を過ごしており、動き回って遊ぶことがない。

次の会話は「同性の友達と普段何をするか。何をして遊ぶのか」という質問を男女にしたものである。ここからも男女の違いが分かる。

Q : 友達とかと、どういう遊びをする？女の子同士とかだったら。

F 2 : マンガ読みよるよね。

Q : 普段ね、友達とかと何をする？

F 3 : なんか、いろいろ。家のこととか、趣味のこととか話す。

Q : 普段、女の子の友達と何をして遊ぶ？何を話ししたりする？

F 4 : え、なんか、クラスの人誰かのこと。

Q : クラスの人の誰かのこと？男？女？

F 4 : 両方。

Q : じゃあ、女の子のことだったら、どんなこと言うん？

F 4 : 絶対言わん！！

Q : 絶対誰かに言ったりせんけ、教えて。

F 5 : 「あの人変よね」とか。

Q : それって、性格とか、行動とかのこと。

F 4 : なんかねー（大きな声では言えないというように）「なんで休んどるんかね」とか。

Q : 普段、友達と何をして遊ぶ？

M 1 : 格闘

M 2 : 格闘

Q : 格闘するん？

M 1 : そうそう、それでよく、M 2 が負ける。

M 2 : ちがうちがう、おれが勝つんだろ、よく。

Q：男の友達といつも何をしてる？遊びよ，遊び。見るマンガとか。

M3：あー，おれ？おれ？ガンダム。

M4：おれ，ゴッドガンダム。

M3：もう，種類はこだわらずに。

Q：筋肉マンとかは見らん？

M5：うわー，筋肉マンー！！筋肉マンⅡ世！

ここからわかることは，女子は友達と会話をする事が多く，その内容も自分自身のことから噂話にまで及ぶ。女子は「人」について話をよくする。そうすることでお互いの考えていること，内面まで入り込める。噂話は秘密ごと，同じ秘密を共有することで“私達是一緒なのだ”という考えになり，より結束が強くなる。だから，「団体でうあーっと」と男子に向かっていけるのだ。男子との戦いに勝てるのもこの女子同士のやりとりのおかげだろう。

男子は，会話をする事より動くことに楽しさを感じており，女子がするような話をしている男子を見かけることはなかった。“個人が主で用事があれば団体に”といったかんじである。だから女子のような団結力は生まれにくい。

2.4. 「個人レベル」とカテゴリー

これまで，教師－生徒，男－女，同性同士の相互作用を見てきたが，男女の思考や行動の違いには驚かされる。なぜここまで男女は違うのだろうか。ジェンダーという視点を獲得するまで私達のほとんどはその違いを生得的なものと考えてきたのではなかったか。逆に言えばジェンダーという視点を獲得した今，男女の違いは，家庭においてはもちろん，学校，教室内での相互作用によって構成されたものだと言えるのだ。だから，ここで教師の位置についてもう一度考えておく必要があるだろう。

「教師は，教室内で生徒に対してある種の権力を有している。教育活動をおこなうにあたって，生徒をコントロールし，学習に関する資料を配分するとともに，

達成度や態度を評価する権限」(木村:1999, 48-49)をもつ。

ということは、教師の認識・実践が、ジェンダーフリーであるかジェンダーバイアスがかかったものであるかによって「男であること」「女であること」のイメージも変わるのではないだろうか。

2.1でとりあげたように、B先生は「個人レベル」という自らに課したルールを裏切り、ジェンダーバイアスのかかった認識をそのまま生徒達に伝えていることが分かった。つまり、「個人レベル」で捉えようとしていると言うのに、自ら男女の特性を分けそれを発言していることに気付かず、当たり前のことだと捉えているのである。B先生が「個人レベル」で生徒達を見ようとする、そのルール自体、教育実践上望まれるものであろう。但し、それだけでは危ういのではないか。ジェンダーの視点で生徒達を見るということが足りないからである。

「個人レベル」とB先生が言い、そのように接していたとしても、現実にはカテゴリーでくくられ、そのように作られている現実がある。B先生自身も2.1.2で「女の子だったら(手で下がるしぐさをしながら)こうなってくるのはあるから」と言いそれを認識している。しかし、そこでB先生は、なぜ女子がそのようになってしまうかという疑問を持っただろうか。「個人レベル」で考えようとしているならばなおさら不思議に思わなくてはならない問題ではないだろうか。

全体として女子がそのようになるのは「女だから」と育てられているからではないのかという視点があれば、女子が「女」となっていく過程を「個人レベル」の問題へと回収してしまうことはなかったのではないだろうか。「個人レベル」の問題では済ませてはならないような質の問題としてジェンダーがあるのだ。だからこそ、「個人レベル」で生徒達を見ているのだからOKなのではなく、ジェンダーバイアスによって動いている生徒達が存在しているという現実を目を向けなくてはならない。「個人レベル」とジェンダーの視点を両方持つことで指導に対する考え方も変わってくるのではな

いだろうか。

3. 「らしさ」「あこがれ」「あきらめ」

3.1. 「男らしさ」「女らしさ」

3.1.1. 性別役割分業のあり方

子ども達は、学校や家庭でするさまざまな活動の中で、「男に向いているもの」「女に向いているもの」と分けて考え、それを「らしさ」として捉えることはあるのだろうか。「学校内の係や活動で、男子と女子で向いているものとそうではないものがあるか」という質問をすることで子ども達がどのように捉えているのかを調べた。

M1：学級委員はどちらでもいいけど、そうじはこんなの女子（が向いている）に決まっとるじゃん。

Q：何で、女子がそうじ？

M1：当たり前よー。こんなんさー、そうじとか整理整頓なんか女子にやらせるのに決まっとるよね。「女の仕事だー」、おれ結婚したらそう言うと思う。例えば、仕事で夜勤とかあって、朝帰ってきて「ただいま〜」て帰るじゃん。それでごみが落ちていたら、「こんなごみ（普段）落ちてないじゃないか」て言うよ。

F1：あんたが自分で捨てんさいや。

M1：「それはお前の仕事だろ」て言う。

ここでM1とF1の会話に注目してほしい。普段の6年3組を知る限りでは、女子の攻撃に反抗できない男子達がいた。しかし、性別による仕事の役割についての話になると、女子の「あんたが自分で捨てんさいや」という、いつもの攻撃の言葉にも男子は引き下がらず、「それはお前の仕事だろ」と言い返している。性別役割についての話になると、自分の考えを絶対に譲らない強気な男子になる。それは次以降の会話へと続いていく。

M1：えっと、あと、給食の盛り付け。これはね、どっちかと言ったら女子。

Q, F2：何で？

M1：もう、主には給食を作るってのが女子。給食室とか…。

Q : ご飯を作るのが女ってこと? 何で男は作らんの?

M1 : えっ!! 何でって… (答えに困る)。

Q : 女の人にも働いとしてからさ、そういう場合はどうする? 女の人には料理をせにゃいけん?

M1 : せにゃいけん。だって、もう、料理ができない人とは結婚せん。

(複数の男子が集まってきてからの会話)

M1 : こういうのってさあ (そうじ・整理整頓を指して) 女がする仕事よね?

M (複数) : うん。あたじゃん (当たり前)。男はできん!

Q : えー。じゃあ、男の子はどういう仕事なん?

M1 : 班長とか…。

Q : ~長とかていう、偉い人ってかんじ?

M1 : うん、うん。男はそうじが嫌い。女がするに決まっとるよー。

Q : じゃあ、女の子はどう思う?

F2 : えー。(男子が) 児童副会長とか…。

M (複数) : えー!!。

Q : じゃあ、副会長が女で会長が男なん?

M (複数) : うん。そう。

F2 : だめよー。女が会長の方がいいじゃん。

M1 : 何でー? きもい (気持ち悪い) んだって、それ。じゃけえ多分ね、(世の中の) 思考もね、男ばかりなんだって。女はね、女中心の政治をするけえダメなんよ。

男子の強気な発言は、人数が増えるとより力を増す。他のことは女子に譲っても自分達の性役割に対する考えを譲ることはできないと考えているかのようである。これは、家事についても同じで、女が家事をして男がするものではないと考えている。

女子は会話の中で、「会長が女子で副会長は男子がするべきだ」と言っており、女が男の補佐をするという考えを否定している。「男が上で女はそれを支える」というような性役割観から抜け出そうとしているように見える。ところが、下の会話に見られるように、「お世話をすること」「ていねいさが要求されること」は女子が向いており、男子はできないとも考えているのである。

F1：連絡係（時間割を黒板に書く仕事）なんかはやっぱり女子がいいじゃん字きれいだし。

Q：男子だって字がきれいな人っておらん？

F2：おることはおるけど、男子はめんどくさがって書くけ、きれいでもきれいに書かん。

ここでの女子達は、教師や男子から押し付けられ無理やりやらされているという感覚ではなく、「男はダメだから女がすべき」だと考え、「お世話をする事」や「ていねいさが要求されること」を自ら進んで引き受ける。「男もやれよっ！」と思いながらも、決して嫌々やっているわけではない。

家事について、女子は男子より「女だけがすべき」と答える割合が少なく、「男も女も両方すべき」と答える割合が多かったのであるが、ここでも性別役割分業の考え方から抜け出そうとしているように見えて、実像は少しずつれていくのである。

Q：「こんな男の子がいい」というのある？どんな人だったらいい？

F1：家事とか手伝ってくれる人がいいよね。

F2：そうそう。

Q：じゃあさ、もう、亭主関白みたいな人は嫌なん？

F2：そうそう。

Q：男でも裁縫とかできるんじゃない？

F3：嫌だ。かっこ悪い。

F4：ていうより、嫌じゃん、裁縫ができる男って。

F3：きもいって言われる。

Q：裁縫ができる男って、気持ち悪いってかんじなんじゃ。

F3：嫌だ。じゃけ、女子がやる。

Q：じゃあ、料理とかって、できんほうがいい？男って。

F3：うん。

F5：でも、ちょっとは家庭的なほうがいいよね。

F3：そうじゃね。魚料理とかさばいてから……。

F4：魚料理とかできる人っていいよね。魚嫌いじゃもんね。

このように、女子は男も家事をするべきだと考えてはいるが、それはあくまで、「女と一緒にする・手伝う」ことを望んでいるのであり、男だけがするものだと考えているわけではない。また、男が家事をてきぱきとこなすことを嫌がり、できる男は「気持ち悪い人」という認識になる。女子は、家事は女の領域で、ある程度男が踏み込むのはOKだが、どっぷりつかるのはNGだという。とすれば、男子も女子も従来の性役割観を内面化しており、それから自由であるわけではないと言えよう。特に男子は当たり前のことと捉え、理由を聞いても答えられないし、その考えを変える必要もないと思っている。答えられないほど子ども達の心の奥底まで入り込んで定着しているのである。この世に生まれてから常に続けられてきた刷り込みの強さがうかがえる。

ちなみに、「男らしさ」「女らしさ」の認識を詳しく調べるために、これまでの社会だと「男らしくない」「女らしくない」と言われる行動を取り上げ、そうしたことをする男女を“かっこいい”と思うか質問を試みた。例えば、「自分でお弁当を作る男子」は、女子はほとんど“かっこいい”と思っているのに対し、男子は“かっこよくない”と思っている。他の項目も同様である。女子は従来の「男らしさ」から離れ、新しいかっこいい男性のイメージを形成しつつある。そして、女子が活発になることも良いこととされ（「女らしさ」から離れ）、ジェンダーフリーが現実のものとなったかのようなのであるが、必ずしもそうではないのだ。伝統的な「らしさ」イメージを超えて広くものを見るようになったと思われていた女子であっても、やはり、心の底では男子を頼りにしたいと思うし、女は守られて当然という考えを持っている。

Q : 男子は頼りにならんと思う？

F1 : ならん。

F2 : でも、やっぱり、男子も頼りになるけど。

Q : どういう時？

F2 : 力仕事…。

Q : 力仕事だったら頼りになるんじゃ。

F2：力仕事とかだったら、女子は重いから、そういう時に。

しかし、このクラスの男子は頼りにならず不満である。実は、女子が男子を黙らせるきつい暴言は、“しっかりしてほしい”“自分達に勝ってほしい”という願いが込められているのではないだろうか。

Q：本当は女子は男子に頼りたいと思う？

F2：頼りたいとは思うけど。

F1：頼りたいと思うけど、今の班だったら、…。

F2：特に無理。（一緒に）倒れたらそのまま倒れるみたいな。

Q：「起きてやー」みたいなかんじ？

F1, 2：そうそう。

女子は、新しい「らしさ」を作り上げようとする一方で、伝統的な「らしさ」イメージもしっかり受け継いでいると言えよう。

3.1.2. 「男らしさ」とは我慢すること

このクラスの男子が、伝統的な「男らしさ」にかなり強くこだわっていることが分かったが、にもかかわらず女子に負けてしまうのは、実は、彼らなりの理由があるのだ。

Q：男と女ってどっちが力が強い方がいいと思う？

M1：マッチョ。

M2：やっぱ男でしょ。

M3：男だろ。

Q：男って強くありたいと思う？

M（複数）：思う、思う。

M1：ボディービルダーで優勝したい。

M3：波動拳出せるようになりたい。

M2：なんか、カメハメ波出せるようになりたいな、俺。

M3：あっ！俺も、俺も。

M4：俺ね、（アンケート）最後の部分、きちんとはっきり書いたよ。「男の子は女だからやり返せないのに、男が弱いとか思われたくない」って。

Q : じゃあ、本当はやり返せるんじゃない？

M4 : うん…、せない？せるんじゃないけど、やり返せるんじゃないけど…。

Q : そうすると女をいじめることになるけ？

M4 : そうそう。やり返す力はあるんじゃないけど、内心やり返せない。

Q : (M5に向かって) やり返せる？

M5 : いやー。

M4 : せれんよねー (できないよね)。

M5 : していいんならする。

M4 : そう、ほんまよ。

Q : じゃあ、何でせんのか？

M4 : えっ？女じゃけーよ。

Q : 女はいじめちゃいけないのか？

M4 : いじめちゃいけないじゃろ。

Q : 力が一緒だったらいいんじゃない？そういうのだったら…？

M4 : だめだめ、乙女心に傷が！！

テレビやゲームで「男の強さ」を目の当たりにする。その体験の連続はやがて「男は強くあるものだ」と当然のように考え、そうありたいと願うようになる。女子に暴力を振るわれたり暴言で黙らされたりすることに対して、本当はやり返し女子を見返したいと思っているが、女子に手を出すことは強い男がすることではない＝「男らしさ」に反する行為だと考え、我慢をしている。たとえ相手の女子がどのような相手でも（例：自分より力が強い、体が大きいなど）、「女」を守るのが「男らしさ」だと捉えているからいじめることはできないと考えている。伝統的な「らしさ」イメージに強い影響を受け、それを守るために我慢をし続け女子の言いなりになる男子。男はつらい。でも耐えること、我慢することは「男」になるためのプロセスなのだ。

3.2. あこがれとあきらめ

子ども達は今の自分の性別に満足しているのだろうか。「生まれ変われるなら男女のどちらに生まれ変わりたいか」という質問をしたところ、結果は、「男」に生まれ変わりたいと思う割合が男女とも非常に高かった。その

理由は以下の通り。

- * 男子：スポーツができる／やりたいことが平気でできる／大黒柱になれる／
かっこいい／子どもを産まなくてよい／緊張をしない／家を1つ支える
／仕事の数が多い
- * 女子：いろいろ遊べる／言葉づかいが悪くてもよい／自分から物事をはっきり
言える／気楽に過ごせる／何もしなくてよい／友情がすてき

上の一覧からは、男子生徒、女子生徒ともに、「男」のことを何でも自由にでき、かっこいいと捉え、同時に強いあこがれを持っていることが分かる。

ここで気になるのは、女子の攻撃に我慢をし続ける男子である。自分が「男」であるために我慢しなければならないのなら、なぜ、「女」に生まれ変わりたいと思わないのか。それを男子に聞いてみると、返ってくる答えはすべてNOであった。「女子は気持ち悪い、かっこ悪い」と言い、「女」には絶対になりたくないらしい。女子に対して強く出られないことがあっても、「男」であることの方が得だと考えている。「男らしさ」へのあこがれこそが男子達に「あきらめ」という名の我慢を強いるのである。男子の「あきらめ」は「男らしさ」の扉を開く。

逆に女子は、「男」の行動とされるものにあこがれはするが自分達ができることは不可能だと考えている。「女」にはできないことと決めつけ、「男」にならなければそれは行えないと思い込んでいる。では、なぜ女子はこのような決めつけるのだろうか。それには女子が集団でいることが関わっていると考えられる。

Q : 授業中って、結構男子って、自分から手を挙げずにどんどん発言するでしょ。女子は何でせんのか？

F1 : 分かるとるんじゃないけど、なんか、恥ずかしいって感じ。

Q : やっぱ、発言するのって恥ずかしい？

F1 : 挙げたいのは、挙げたいけど、確信がないと挙げれん。

Q : じゃあ、男子は間違ってもいいんじゃない。

F1 : (男子は) なんか思い切りって感じがある。男子はそこがいいなと思う。

F2 : 自信がないものは挙げん。

F1 : 自信がなくても、言ってみようてのがあるけ、男子は偉いと思う。

Q : 男子だとね、思い切って何でもできるってことを聞くんだけど、何で、女子だったら思い切ってできんの？

F1 : なんか、恥ずかしいのがつきまとう。

F2 : 恥ずかしいよ。

Q : 恥ずかしいってのがあるんじゃ。

F1 : 男子は、どうでもいいっていうか、何かパッパラパーみたいな感じがあるけ。

F1, 2 : そうそう。

Q : 女子は何でも恥ずかしさがつきまってくるんじゃ。それで、男になったらそれができるんじゃ。

F1 : そう。女子はバカげたことが大嫌いみたいな。

Q : 女はバカげたことができんのじゃ。

F1 : やろうと思えば、できることはできるかもしれんけどあんまりやる気にはならん。

Q : もし、もともと、女の子がそういう風な人 (男子に連想されるようなこと) だったらできる？

F1, 2 : うん、できる。

F1 : でも、周りのみんなのね、雰囲気的にね、「わーわー」ってかんじじゃなくて、女子って、おしとやかみみたいな、3組の女子はみんな、おとなしっぱいのがあるけ。

Q : 他の女の子のことがあるけ、自分が飛び出せないみたいな

F1 : うん、うん。

女子は常に恥ずかしさがつきまとい、その恥ずかしさは女子集団内で形成される。ひとりで目立つことは集団の中では恥ずかしいこと、いけないこととされる。だから、周りの女子と同じような行動をとるようにし、集団内で自分の居場所を確保する。女子集団内に所属することで「男」の行動は「女」にはできないと捉えるようになる。そして、「女」として何をすべきなのかを学んでいき、それでいいのだと思うようになる。「男」の行動へのあこがれる女子ではあるが、女子同士のピアプレッシャーも深く関

わり、あきらめによって扉は閉ざされ、やがて「女らしさ」という部屋へ入っていくことになる。

3.3. 求める異性像

「男らしさ」「女らしさ」が確立しつつある中、子ども達はどのような異性を求めているのだろうか。そこで分かってきたことは、男女に大きな違いがあるということである。

F1：このクラスがり勉ばかりよね。

Q：勉強そんなにせんといけんのかね？男子って。

F2：塾、塾、塾、勉強、勉強、勉強よ。

F3：そうそう、遊ぶ人なんかあんまりおらんよ。

F1：でもね、Tって奴は結構、勉強と友達は両立しとるよ。

Q：男子って勉強の方が大事なんかね？

F1：遊ぶときは遊ぶけど、なんか種類が違う。勉強と遊ぶのを両方できる人と、勉強しかせん奴。

F2：Mは両方するよね。

F3：だってゲームとかしよるもんね。

Q：ゲームとかして、勉強ばかりせん男子の方が、好かれるわけ？

F1：勉強をせんっていうか、まあ、普通のはしてもいいけど…。

Q：頭がいいってのは条件なんじゃ。

F3：ちょっと頭がよくて、授業についていけて。

F1：そうそうそうそう。全然ついていけてないってのじゃなくて。まあまあついてこれるけど、友達を大切にしたりとかね。そういうのができたらいいと思う。

Q：友達を大切に人がいい男の条件なんじゃ。

F1：そうそう。友情とかね、カッコいいよね。男の友情とかって。

Q：じゃあ、男の子の行動とか特徴とかある？「これが男」みたいな。

F2：やっぱ、サッカーとかできたり。

F1：スポーツできて、勉強まあまあできて、顔はそれほど気にしないけど、性格がやさしいとか。

Q：じゃあ、やさしくないといけんのじゃね。

F1：そうよ。男は優しくよ。スリーピースよ。

Q : 「男ってこういうものよ」って考え方ある? 「男ってこうないとだめ」って
いうか, 「やさしい」とか「力が強い」とかある?

F4 : やさしいのはやっぱいると思うけど, 気の弱いのかは…。

F1 : おろおろするのはだめよ, おろおろは。

F4 : そうそう, はっきり。

Q : 女の子には「こうしてほしい」とかある?

M1 : ある。死んでほしい。

Q : 自分が結婚するなら, どんな人がいいって考えたことある?

M2 : きもいやつ, きもいやつ。

M3 : それ, 決定!!

M1 : たばこを鼻で吸う女。

女子は, 自分達が求める異性像をはっきりと発言できる。「顔よりも性格。やさしいことは絶対条件。勉強と遊びを両立できるし男友達も大切にする。いつもハキハキしていること」と, かなり詳しい理想の男性像を持っている。前節でも説明した通り, 女子は「男」にあこがれていても, 自分達は「男」になれないと分かっている。だから, 異性として求める時にそのあこがれを加え, 「男らしさ」の概念の広がりもプラスされ (新しい「らしさ」+伝統的「らしさ」), より広い男性像を作り上げている。また, 女子は理想の異性について友達と話すこともあるようで, 女子集団の中でお互いの思いを言い合うことでより広がりを見せ, 異性像を形成していくとも言える。確実に異性を想定した生活が成立しつつある。

男子は, 会話からも分かるようにこの質問に関してまともに答えようとしない。理想の異性を具体的に考えるより, 周りの男子とうまくやること, 「男」を磨くことに力を注いでいる。その証拠に, 男子達の普段の会話の中で女子の話題が出るのは「殴られてむかつく女子のこと」や「嫌いな女子のこと」などで, 女子のように理想の異性を語り合うことはない。それよりも男友達と遊ぶこと, 強くなるために何かをする方が楽しいらしい。

4. 男 女 の 姿

6年3組の学校生活に入り込むことによって生徒達の内面をかいま見ることができた。男女は伝統的な「らしさ」を確実に受け継いでいると言える。

女子は、すでに自分が「女」であることを十分に認知し、「女」であるためには何をするべきか、何をしてはいけないか、何ができないか、どのような行動をとるべきなのかを分かっている（性役割の受け入れ＝ここで言う性役割とは、女がする仕事だけに留まらず、行動、心の持ち様も含まれる）。それは、異性である男子や女子集団との相互作用を通して学んでいる。異性を強く意識し続ける道へと進んでいく。「異性あつての自分」なのだ。

男子は女子を「女」として捉えることはあまりない。それよりも「立派な男」になるために自分を磨いている（自分の性の認識は強い）。自分が「男」であるから、「男として何をするべきか」だけは理解している。そして、従来の性役割観や「女らしさ」に非常にこだわっている。常に女子より優位でいる、それが「男」なのだ。

この男女の違いはそれぞれが持つモデルの違いにあると言えるのではない。男子は、現実の父親以外にも、モデルとしてシンボリックな存在に多く触れることが可能である。モデルとなりやすい男性としてイチローや中田などのプロスポーツ選手があげられる。彼らの姿を目の当たりにし、自分達もそうありたいと願う。女子にとって、モデルとしてシンボリックな存在は男子よりも限定的である。テレビや恋愛小説に見られる「男につくす、男との出会いによって成長する女」や、男に好かれるかわいいアイドル。それらを目の当たりにしつつ、異性との関係の中で自分を磨く「女」像を内面化していく。だから女子は小学生という時代から男子を「男」として捉えるようになる。

男子は女子の攻撃に対して何も言えずつらい立場に置かれている現実があるが、それでも「男」であり続けたいのは、「男」の方が有利だと思って

いると同時に、「いつかは役割モデルのようになれる」という気持ちがあるからだとも言える。もし、男子にとってこのような象徴的なモデルが消えてしまうと、6年3組の場合、女子にバカにされる嫌悪感、担任に差別をされていると思う不信感*が重なり合い、自分が「男」であることが極めて否定的なものになってしまうだろう。どこかにモデルという望みがあるから6年3組の男子達はあの場で生きていけるのだ。

また、6年3組の子どもが持つ「らしさ」イメージは、担任のB先生から受けつがれていることも分かってきた。B先生に「個人レベル」というルールを裏切らせてしまうジェンダーバイアス。それを生徒達がそのまま受容することで、生徒同士のやりとりにおいて再構成され、男女の思考の違いにも影響していると言える。この世に生まれて10年弱、子ども達はすでに「男」「女」としての道を歩み続けている。

5. お わ り に

本研究は、「教育とジェンダー」の成果を下敷きにしたものである。しかし、「こんなところに差別がありました」と指摘をするだけで終わるつもりはない。生徒達の生の感覚の上に立ったジェンダーフリー教育はいかに可能かを最後に述べることにしたい。

生徒達の性認識に関しては、「あきらめ」の部分もあるが、今の自分に満足していることがほとんどだ。特にそれは女子に関して言える。女子は自分が「女」であることを100%ダメだと捉えてはいない。「男と女のどちらに生まれ変わりたいか」という質問に対しては、男と答える女子が多かったが、それは「どちらかを選ぶなら」という回答が多く含まれ、必ずしも「女はイヤ!だめ!」と思っているわけではない。女子が「ていねいなこと、お世話をすること」は嫌々ではなく、自分にプラスだと思ってやっている。ていねいであること、お世話をできる繊細さ、これは価値あることだろう。

* 男子は、担任による女子と男子との扱い方（例えばしかり方など）が違い、それは男子に対する差別であると考え、不信・不満を持っている。

ところが、男ときたら…。

社会構造の中で「女」がしている仕事が時として価値の低いものとして捉えられることがある。しかし、それをしている本人にとって必ずしも嫌なことだとは限らない。ジェンダーフリー教育はこの事実を大事にし、ここから出発しなければならないのではないだろうか。もし「女」の担っている役割は劣っていてマイナスなのだという一方的な指導をしたとしよう。それを聞く女子達は自分自身の存在を全否定されたと思うに違いない。ジェンダーフリー教育を進めるならこの点に関する理解が必要ではないだろうか。

本研究は小学校の1クラスだけを対象とし、そのクラスの生徒達がどのような考え方をしているのかを探るものであったため、現代の小学生一般を論ずることはできなかった。しかし、小学生を知る1つの道しるべにはなるだろう。

最後に、本研究のために観察調査を行うことを了承していただいた校長先生、担任のB先生、そして、一緒に学校生活を送ることを快く受け入れてくれた6年3組の生徒達に心から感謝します。

【文 献 — 覧】

- 天野正子 1988 「『性と教育』研究の現代的課題—かくされた『領域』の持続—」
『社会学評論』第39巻3号
- 伊藤公雄 1998 「ジェンダーの視点から現代社会を読む」伊藤公雄，牟田和恵編
『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社
- 氏原陽子 1996 「中学校における男女平等と性差別の錯綜—二つの『隠れたカリキュラム』レベルから—」『教育社会学研究』第58集
- 金井淑子 1997 『女性学の挑戦—家父長制・ジェンダー・身体性へ』明石書店
- 亀田温子・館かおる編著 2000 『学校をジェンダー・フリーに』明石書店
- 木村涼子 1998 「学校にひそむセクシズム」伊藤公雄，牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社
- 1999 『学校文化とジェンダー』勁草書房
- サドガー・M & D (川合あさ子訳) 1994=1996 『「女の子」は学校でつくられる』時事通信社

- 西條容子 1998 「『ジェンダーと学校教育』研究の視覚転換—ポスト構造主義的展開へ—」『教育社会学研究』第62集
- 宮崎あゆみ 1991 「学校における『性役割の社会化』再考—教師によるカテゴリー使用をてがかりとして—」『教育社会学研究』第48集
- 望月重信・近藤 弘 1999 「ジェンダー形成と子どもの社会的世界」日本子ども社会学会編『いま、子ども社会に何がおこっているか』北大路書房
- 森 繁男 1989 「性役割の学習としつけ行為」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社
- 吉原恵子 2000 「ジェンダーの視点から教育現場を見る—『女』／『男』ラベルを纏う教師の役割を探る—」永井聖二・古賀正義編『《教師》という仕事＝ワーク』学文社

Summary

Gender Ethnography in a Classroom at Japanese Primary School

Nobutaka OOBA & Hiromi KAWAHIRA

Gender is socially and culturally constructed unlike “sex”. Then, how is it constructed? To describe how it is, we recorded various kinds of interaction in a classroom at primary school. In this thesis, we argue how their gender identity is built and how it is intensified by interaction in a classroom.

School children of 11 or 12 years-old considerably seem to hold gender identity. Boys occupy a dominant position during sessions, but, they can not occupy the same position under different circumstances. Girls are afraid of making mistakes and hesitate to express their opinion during sessions, but, they often fight against boys as a group and are able to win in casual situation.

When pupils' gender identity is intensified, interaction with the same sex is important as well as it with the other sex, furthermore, interaction with teachers considerably influences its process. In our research, a class teacher has a rule such as “look each pupil as individual” and is indifferent toward a category like as gender. But, this indifference makes him betray his own rule, because he is also indifferent to his gender bias. Actually, he constructs typical gender concept and convey it his pupils.